

近代洋画史に輝かしい足跡を残した

三岸好太郎

鋭敏な感受性で時代に先駆けた意欲的な作品を生み、近代日本洋画史に異彩を放つ画家、三岸好太郎を紹介します。

三岸好太郎は、明治三十六年（一九〇三年）四月十八日、南七西四に生まれました。

アカシア並木の美しい開拓の町札幌の西洋風の町並みの中で、三岸は少年時代を送りました。札幌の風物や厳しい北国の風土から、自由奔放な性格とたくましさとはぐくんできました。

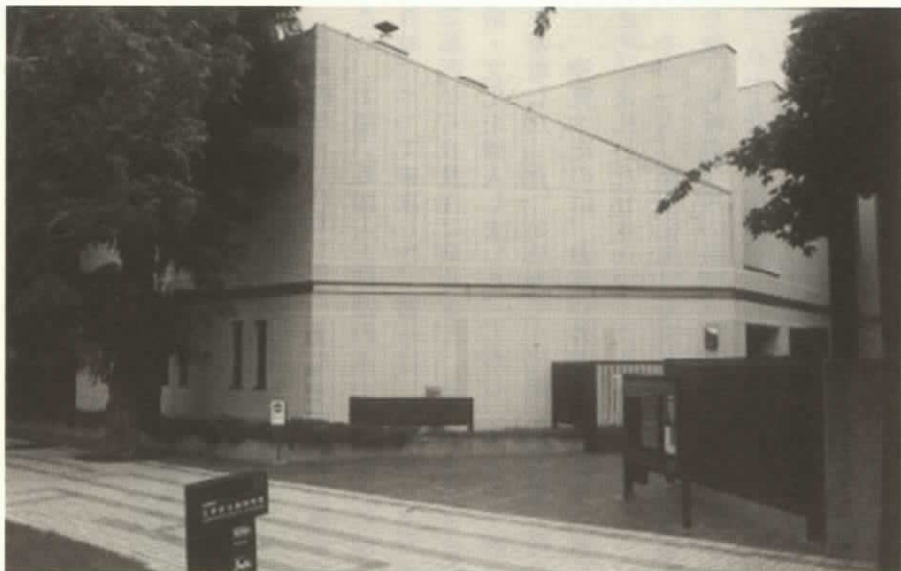
中学時代には、よく一人で北大構内に行き、小説を読みふけたそうです。絵画に関心を持ったものこのころでした。

大正十年（一九二一年）、札幌一中を卒業した彼は、親友の俣野第四郎またのだいしろうとともに上京。このころの手記には、「草や木の自然物のようにそれと同じように生きてゆく。そうして感激して描きたくなかったならば描こう」と記しています。

上京して間もなくの三岸は、働きながら休日に写生に出掛けては、美術展に応募する日々が続きました。そして、二十歳を過ぎたころには、天才画家の出現として洋画界からの注目を集めるようになりました。十五年（一九二六年）、中国旅行をした三岸は、上海で見た西欧的な風物、特にサーカスから大きな影響を受けました。彼は後に「道化」をテーマにした一連の作品を生み出しました。

その後、ヨーロッパの現代絵画の新しい動きを取り入れた彼は、昭和八年ごろから作風を大きく変化させました。「檸檬れもん持てる少女」のような素朴な画風は消え、「コンポジション」などの抽象画や、超現実主義的な「飛ぶ蝶」など、個性的な絵画世界を築き上げます。しかし、そうした中、好太郎は九年、旅行先の名古屋で急逝。三十一歳の若さでした。それから三十一年後の四十年、札幌に滞在中の節子夫人は、雨上がりの明け方の街を見て、「札幌は何と美しい町だろう。三岸の作品をこの故郷へ返そう」と強く感じたそうです。

こうした夫人の思いを受け、四十二年、北海道立美術館（三岸好太郎美術館の前身）が開館。その作



「北海道立三岸好太郎美術館」

品の数々を見られるようになりました。

(平成十一年四月号・第五十五回)